

1 - 日本 -

俺は入社3年目。24歳の一般的な会社員だ。

仕事は辛いが慣れてはきた。特に問題を抱えるでもなく人並みにやってきたつもりだ。

そんな俺の平凡な日常は今危機を迎えている。

「やはり、お前がこの宝剣を扱える戦士だったか……」

そう言って一人頷くのは戦士風の格好をした女性。

本人曰く戦士ではなく、ちょっぴり戦いに長けた大国の姫であるらしい。

そして彼女から渡され、今俺の手にあるもの——見た目はアルミで出来た無骨な円柱のバトンにしか見えないが、その先からは光が伸びている。なんでもこれは持ち主の特殊な波動を剣へと変える国宝の剣で、彼女の国では扱えるものが誰もいないそうだ。

そこでその波動を感知する装置を作り、それを辿ってきたら俺がいた。そういうことらしい。なるほど分からん。

(……しかし、俺は知っている。こんな話を知っている)

「無論、お前にも生活があり、この世界でのしがらみもあるだろう。このような突然の話に素直に頷いてくれるとは思わない。なので明日再びこの場所に扉を開き迎えに来よう。その時に返事を聞かせてくれ。……あまり時間を与えられずすまない。しかし、一つ言っておく。お前

……いやあなたなら出来ると私には分かる。これはあなたにしか出来ないことなのだ」

彼女はそう言って頭を下げると、確かにアンティークではあるがこの汚く寂れた公園には似つかわしくない、姿見のような扉へと帰って行った。

後には今も薄らに青鈍色の光を放つ棒、そして救世主候補となった俺だけが残った。

それはあまりにも突飛な出来事で、彼女はあまりにも説明不足過ぎた。

一体どこにある国なの？

この剣で何を斬るの？

敵がいるとしてそれは誰なの？

行ったら戻って来れないってこと？

きっと国でも政が得意な姫ではないのだろう。説明不足で口下手で。おまけに彼女は一つ見誤っている。

別に例えしがらみがあろうとも、無理に連れて行けば俺は逆らわなかったはずだ。

だって知っているのだから。

俺は——いや、多くの方は知っているのだ。

突如現れた異界からの扉、そして救いを求められるその物語を。

剣を携え、魔法を使い、悪と戦うその世界を。

そんな物語に誰もが憧れていることを。

そこは魔法三大大国の一つ、ミリアノガルドの地下宝物庫。

平時ならば、王族の者がわざわざ好き好んで立ち入ることもない埃と汚れに塗れたその一室であるが、現在の王城の荒れ方を見ればそこに王族——ましてや一国の姫がいようとも疑問に思う者は少ないかもしれない。三大大国の残り二つを取り込んだ魔物の軍による度重なる襲撃。物理的、魔法的障壁どちらも優れたこの城も最早崩れる時を待つばかりであった。

最も姫がこの部屋に来ているのは、何も追い込まれてのことではない。使い手を選ぶものの、どんな魔族であろうと両断することの出来る退魔の剣。

そして、国が傾いた時のみ光を放ち、触れたものを別世界へと誘う異界の扉。

この二つがミリアノガルド国最後の砦であった。

「はあ……」

あちらの世界へ移動していたのはほんの数十分であったが、姫は疲れ切った顔で一息つく。

なにせ見知らぬ世界で見知らぬ者に一国の全てを預けて来たのだ。

姫はどちらかと言うと政よりも戦そのものの事を考えていることが——と言うより何も考えずに戦に出ている方が好きな性質ではあったし、ああいった交渉などは元より苦手であった。

それでも一国を預かる身として、先程のやり取りの重要性も後には退けぬことも全て分かっている。その重責は身体だけでなく精神まで疲弊させていた。

「はあ、早く戦いに出て体を動かしたいものだ」

そう一人呟き、まだ光を放つ扉を見上げて更に一言付け足した。

「……出来れば次は先程の者と一緒にな」

そうは言ったものの彼が来てくれるかなど、遠く異国の地の姫に分かるはずもなかった。

3 - 日本 -

考える時間は時間を貰ったが、俺の心は決まっている。
しかし、後始末が大事と言われれば確かにその通りだ。
やるべきこと、後始末。そうだ。

俺は会社に辞表を出した。

昨日までは普通に、次の日の仕事の支度をしての退社だ。
それが今朝になってこれでは会社側も驚くだろう。
案の定理由を聞かれたり、引き継ぎはどうするんだと責められたり、
上手く理由を言えない俺を叱責したりと面倒なことになった。
しかし本気で辞めようとする者を引き留めることは出来ないだろう。
去り際に上司が放った「そうやって中途半端にやっているとどこ行っても続かないよ？」と言う一言が少し心に残る。感動したんじゃない、あまり不安なことを言わないで欲しいと思っただけだ。

まあこれで細やかな心残りもなくなった。

黙って異世界に行くよりは社会的マナーもあるだろうし十分だろう。
会社を出てからもう一度だけ振り返る。

こういった普通の会社勤めをしていた頃を懐かしく思う時が来るかもしれないな。

さて、少し時間も早いが昨日の公園に行こう。

寂れた公園は昼に来てても子供一人見当たらなかった。

昨日姫が現れたのが夕方くらいなので、少し早く着きすぎたが余裕を持つのは良い事だ。

軽く手で落ち葉を払ってベンチに腰かける。

「……………」

昨日の出会いから何度も頭の中では、ファンタジーな想像をしまっている。

相手は魔王なんだろうか。それとも竜か何か……………？

俺は特に武道の経験も剣道すらやったことはない。いくら質量のない光の剣だからと言ってまともに扱えるものなんだろうか。

それでも想像の中の自分は勇ましく戦っていた。

何を根拠に言ったのかも分からないお姫様の言葉を信じて。

そうだ、元より分からないことが多すぎる。不安を抱えては切りがない。

今の俺の力が求められているなら、ただ出来ることをやればいいんだ。

俺は覚悟を決めて、ただ迎えを待つことにした。

だがその日——いや、次の日もそのまた次の日も、迎えが来ることはなかった。

4 - ミリアノガード -

「侵入経路はどこだ！？」

「武器庫への道既に塞がれています！」

「どうやら使われていなかった古い地下水路から」

「正門前応援お願いします！！」

「駄目だ……この城はもう……」

「錯乱するな！まだ姫が——」

夜明け前の警報から数時間。城内は混乱の極みと言えた。

空からの襲撃を主としていた魔軍だったが、どうやらそれは下へ目を向けさせないための陽動であつたらしく、夜中に地下からの進軍があつたのが数時間前。それを予期していた者もいなければ、それを防ぐ手立ても残されてはいなかった。

そんな中、姫は配下を盾にしつつ地下への道を走る。

彼女だけは知っていた。侵入を防ぐ手立てはなくとも、まだ逆転の目は残っていることを。

彼がこちらに渡ればまだ希望があることを。

そして、多くの味方を犠牲にしつつ、本人も満身創痍となりながらも地下宝物庫へと辿りつく。

「……………ッ！！ 遅かった…か……！！」

そこにあつたのは、周到に粉々に破壊された異界への扉だった。

——望みは潰えた。

今の所かの場所に行く唯一の道は失われ、対抗すべき宝剣も置いてきてしまった。

またあそこへ行けるのは何年後、何十年……いや、おそらく永遠に行くことは……。

戦火の喧騒も城の崩壊の音も、呆然と立ち尽くす姫の中ではどこか遠くの事に感じられた。

5 - 日本 -

結局、約束の日から丸一日は律儀に座って待ち続けた。

3日目には近くのコンビニでご飯を買って、また戻った。

4日、5日と似たような日が続き、1週間経ってようやく一度家に帰った。

思えばこの時期が一番恐ろしかった。

暗がりに放り出されたような。

水平線しか見えない海原に空から叩き落とされたような錯覚があった。だが半月もすると少しだけ冷静さを取り戻し始め、考える。

あちらの世界で何かがあったのか。そもそもあれは夢だったのではないか。

考えたところで、予想されるその二つをグルグル回るだけで一向に動きは起きない。

何をするでもなく、ただ貯金を食い潰しながら生きる為に最低限の物を食べ睡眠を取り、公園の何も無い空間と時計の針を見比べる日々。一日がこれほど長いものとは知らなかった。

このままでは長くは持たない。何をする？

会社には戻れないだろう。たかが3年、特別重要な役職でもなく、半月も過ぎてしまっている。

……………それでも、頭を下げればもしかしたら、復職出来る可能性があることは勿論分かっていた。

——だけどそれは出来ない。

見てしまったから。ここではない別の世界を。

誰もが一度は夢想する物語の序章を。

そこで生きる自分の姿を夢に見てしまったから。

もうここで生きていくという発想は出来なかった。

勿論それを含めて全て夢だと思い込んでしまおう———そう思い込むには、やや鮮烈な体験ではあったが、無理にでもそう思い込んで全てを忘れてしまおうという選択肢はあった。

いや、あったと言うべきか無かったと言うべきかは微妙なところだ。

その選択肢は既に潰されていたのだから。

「宝剣……か……」

家の引き出しに入った何の変哲もない鉄の棒。

しかし握ればそれは発光し、少し意識すればその光は刃となる。

毎晩のように眺めるその光こそが、あれが現実の証であり

——俺の半身をあちらへと縛り続ける楔でもあった。

.....

.....

.....

あっという間に3年の時が流れた。

さすがに貯金のみで暮らしていくことは出来ず、日雇いのアルバイトで何とか生計をたてている。

入る時間帯は主に早朝から昼過ぎ、遅くとも夕方までには終わるものを選び、仕事が終われば公園へ足を運ぶ毎日。

ある日、仕事先で丁度良い長さの鉄パイプを見つけ貰うことが出来た。ただ待つのみ時間は素振りの時間へと変わる。特に誰に教わることも出来ないのも全て自己流だ。別に強くなりたわけではない。ただ何かをしていないと押しつぶされそうなのだけだった。

いくらか生活パターンは変わったものの、中身はあの日から一步も前進していない。

定職に就かないのだから、いつでも出かけられるようにである。

そして、帰ればいつものように引き出しを開け、たった一つの繋がりを握りしめる。

手垢や傷も多くなったが、その放つ光は衰えることもなく、それは生きる意味そのものでもあった。

5年が経つ。変化はない。

10年が経つ。知り合いらしい知り合いがいなくなり何年経っただろうか。

15年。20年……。

気付けばあの日から31年と7か月が経過していた。

今日の仕事はひたすら力仕事な上に人手不足。

とにかく疲れたが、早めに帰ることが出来たのが救いだっただ。

時間もあつたので、一度家に帰って一息ついてから公園に来ることが出来た。

「ふう……」

寂れた公園は、約束の地だからだろうか。30年前と変わらずに見える。

いや、ただ毎日来ているから変化に気付けないだけだろう。このベンチも、錆びて誰も使わない遊具も、俺と同じく30年だけの歳をとっているのだ。

少し休憩したら素振りをして、走り込みをしてまた休憩する。

休憩の時間は明日の仕事の予定を確認するまでが日課だ。

様々な業種を見ていると分かることだが、俺と同じくらいの歳で同じような生活を送っている人はいくらでもいる。

理由は様々だ。

単に定職に就けなかった者も、仕事が嫌いでギリギリまで働こうとし

ないものも、長年勤めた会社をクビになってしまったものも、そして中には俺の様に異世界からの迎えを待ってる奴だっているかもしれない。

俺は選ばれた特別な人間なんだと思っていた。それこそつい最近まで思っていたかもしれない。

しかし実はそこに大した差はないんじゃないか。

理想の世界に行ける奴なんてそう多くない。誰だって何かを待ってたり、必要とされる場所を探したり、放り出されて行く場所を見失っている。

なんだ、別に普通のことだし不幸でもなんでもないんだ。

……………。

(有り触れたどこにでもある生活だ——それでも。)

俺はポケットから装飾もなく無骨な棒を取り出した。
一見するとそれはアルミで出来たボタンにしか見えない。

(それでも……)

かつては白銀だったそれも薄茶色になり、表面は傷だらけになっている。

しかし、俺が力を込めると眩く光を放ち始める。
数年、数十年と毎日眺め続けた俺だけの光だ。

そのまま宝剣を抱きしめるように俯いた。
手にポタリと滴が落ちる。

あれ？ 俺は何で今更泣いてるんだ？

そうだ、気付こうが気付かまいがそんなのどうでも良い事だ。

あの日心だけ連れ去られた俺に理屈なんて意味はない。

ただあの場所に行きたかった。例え俺以外の誰もがただの妄言だと断言しても、それでも俺は。

(諦められなかった……)

光に吸い込まれるように止めどなく涙は流れ続けた。

終

涙を流しながら俯いていると、一瞬目の前が光で包まれる。

顔を見上げれば、この寂れた公園を背景にして更に酷い状態の扉が現れた。

かつては趣味の良い装飾だったのだろうが、まるで一度粉々になったものを再び繋ぎ合わせたかのようなそれは、現れた瞬間から既にパラパラと崩れ始めている。

そして中から一人の女が現れた。瘦身に鎧をまとった50ほどの妙齢の女性だ。

美しいとは言えないが、長らく戦ってきたかのような威厳が漂っていた。

女性は俺を見て驚いたような、あるいは泣きそうな顔をしたが、やが

て口を開く。

「すまない……奪われてしまった城へ侵入しての扉の回収、そして魔族の目を盗んでの修復。悔やみきれない程の月日が流れてしまった……あと……いや、もういい」

その女性——ミリアノガルドの姫は言い訳をするためにここに来たのではない、そうとでも言うように俺に向き直った。

「あなたがずっとその宝具に力を込めてくれたおかげで、この地を見失わずにまた来ることが出来た。感謝する」

感謝、か。しかしそれも本当に言いたいこととは違う気がする。

姫もそれに気付いたのだろう。先ほどまでの真剣さがやや崩れてバツの悪そうな顔をした。

そして今度は少し微笑むと手をこちらへと差し伸べる。

そうだ、彼女が言うべき言葉は始めからたった一つだけなのだ。

「……助けが欲しい。来てくれるか？」

俺が返す言葉は既に決めてある。

準備は出来てます、とただ一言だけ——。

(了)

あとがき

異世界の存在が証明されていないこと。
それが現世の唯一の良い所ですよね。そんな話。